

野鳥だより

—北海道—

ISSN 0910-2396

北海道野鳥だより第136号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成16年6月21日

オオマシコ



2004. 1.24 札幌市西岡公園 撮影者 稲村 勇一

〒062-0932 札幌市豊平区平岸2条8丁目

2-6-305



も く じ

私の探鳥地 (48) 平岡公園 (札幌市清田区)

川東保憲・知子 2

北海道におけるヒヨドリの繁殖期の分布

藤巻 裕蔵 3

霧多布鳥案内

片岡 義廣 5

コムクドリ脚環付けのこと

早瀬 廣司 10

平成16年度総会報告 12

探鳥会ほうこく 14

探鳥会あんない 16

「野鳥だより」の正式誌名について 16

鳥 民 だ よ り 16

私の探鳥地 (48) 平岡公園 (札幌市清田区)

川東保憲・知子

自宅から歩いて5分程の所に、梅林で知られる平岡公園があります。5月はじめ、約1,200本の梅が次々に咲きます。緑の芝生に点々と置かれたピンクの濃淡、青い空と遠くに見える山々……。高台から見る梅林は春そのものです。梅見で賑わう梅林をよそに、わたしたちはほとんど裏山(梅林を表とすれば)を歩き回っています。オオカメノキが枝いっぱい白い花をつけています。エンレイソウが咲き始め、ヒメイチゲも谷浴いでひっそり可憐な花を見せてくれます。梅林とはちがった静かな春がここにはあります。

鳥ではなく花の話になってしまいました。ここ平岡公園は、ずうっとわたしたちが野の花を楽しみながら歩く場所だったのです。鳥見を始めた頃は時間をやりくりして野幌、ウトナイ、千歳川など愛護会でおぼえた探鳥地に出かけていました。ここはあまり近すぎて「カラくらいしかないのでは」と軽くみていたのと、鳥見は「探鳥地」であるもの、と思い込んでいたのかもしれませんが。

2年ほど前のある日、遠出する時間がなくて、ポケットに双眼鏡を入れこの公園に出かけました。素敵なさえずりに誘われて山に入り、当てずっぽうに向けた双眼鏡にはいつてきたのは、覚えたばかりのオオルリでした。林があるところならどこにでも鳥はくる、と納得。この時から平岡公園は「私の探鳥地」に昇格したのです。

平岡公園は、清田区平岡と里塚にまたがる70haもある総合公園です。道央自動車道をはさんで東地区に野球場、テニスコート、遊具広場などのスポーツ施設が、西地区は梅林と昔からの自然を活かした山林、湿地、草地、そしてかつて石狩平野にあった湿原を再現した人工の湿地と池があります。「私の探鳥地」は、もちろん西地区です。

さて、ここ2年のメモをもとに平岡公園西地区の四季をめぐってみましょう。

3月半ば、空にアオサギの姿をみつけたら鳥見シーズンの幕開けです。公園近くのジャスコにあるコロニーにアオサギが帰ってきたのです。春から秋、いつも上空にアオサギが飛んでいるのもこの特徴でしょう。

4月、ちらほら水芭蕉が咲き始め、いつもいる鳥たちの声が囁りにかわる頃、旅の途中にちょっとだけ寄っていくお客様がいるので、目にはなせません。鳥見は2人で出かけることが多いのですが、この時期はヒマナ者が“巡回”をすることになります。

去年は4月3日、草地に出たとたん目の前に、オレンジのからだに黒い顔、銀色に輝く頭の鳥がいてびっくり。一人だったのでドキドキしながら本と見比べ、ジョウビタキと確認しました。今年は4月16日に二人そろって見ることができ、ラッキーなシーズンインとなりました。

この前日15日には一人で、クマガラ、オオアカゲラ、アカゲラを同時に見てしまい「クロ、アカ、ゲラゲラ」と仕事の人にメールを入れてしまいました。「カワセミがいるぞー」と連絡が入ってかけつけたこともあり、春の鳥見



にはケイタイも活躍しています。

ジョウビタキを筆頭に、ベニマシコ、ベニヒワ、ルリビタキなどがちらりと姿を見せ、カワセミやホオジロがいつもの場所に落ち着くと、次々に夏鳥がやってきます。アオジ、モズ、ヒバリ、キジバト、カワラヒワ、ニユウナイズメ、メジロ、ウグイス、センダイムシクイ、アカハラ、ハクセキレイ、キセキレイ、そしてキビタキやオオルリ、クロツグミの歌が響きます。巣造りも始まります。

草地に大きなトドマツがあり、アカゲラの開けたらしい穴がいくつも並んでいて、わたしたちは「マンション」と呼んでいました。去年はここからアカゲラの子が3羽巣立ち、古い穴もコムクドリが使っていました。それが今冬のひどい風雪で、3分の1を残して倒れてしまったのです。幸い利用者は今年もいて、倒壊をまぬがれたうちの最上階に今、ゴジュウカラの夫婦が出入りしています。

5月、ハウチワカエデに赤い花房が下がります。山道では足元に小さなフデリンドウの、紫と白のツーショット、ヒトリシズカも顔を出します。

6月、山のあちこちでチゴユリが迎えてくれます。タニギキョウ、コケイラン、ギンリョウソウが人目を避けるように花をつけます。鳥たちは子育てに忙しくなります。カモの親子も歩いているカモ。

7月、人工湿地がにぎやかになります。ヤブカンゾウ、キショウブ、クサレダマ、エゾミソハギ、ギボウシ、サワギキョウなどが8月まで咲き競います。湿地の木道沿いにオニノヤガラがによっきりと立ちます。去年はシロツメクサの咲く草地で、若いアオサギを見ました。近くにいるわたしたちを気にする風もなく、エサ取りに夢中でした。あの時期、あの動作からバツ採りではないかと思うのですが・・・。

8月、双眼鏡でよく見てください。人工湿地でモウセンゴケが花をつけています。ミズアオイも青い花を開き、オニヤンマや青いイトトンボが飛びかいます。

9月、ミゾソバが溝を埋めます。オオカメノキ、ガマズミ、チョウセンゴミシ、アクシバ、ユキザサ、ツルリンドウ・・・。花の終わった山に実の赤が色を添えます。ツクバネソウが追羽根の形になり、サワフタギが瑠璃色になると、もう秋です。

10月、カシラダカが枝の間から頭を見せ、山の枯葉の中には盛装?のベニテングダケが現れます。

11月、蒲の穂がはじけ、ガガイモの種が舞います。ナニワズは蓄をつけて越冬の準備です。マヒワの群れが飛びます。

12月、ツルアリドウシの赤い実に雪が積もります。

1月、レンジャクとツグミの群れが駐車場のナナカマドを食べつくします。

冬の間、駐車場は閉鎖されるのでほとんど人の姿はありません。3月まではスキーをはいて静かな雪見です。運がよければミソサザイが歌を聞かせてくれますし、アカゲラ、コゲラ、エナガ、カケス、キバシリ、シメ、キクイタダキ、カラ類たちも顔を見せてくれます。もちろんここでもヒヨドリは一年中、一番の元気者です。

よそで何度も見ている鳥でも、ここで初めて確認できた時は「いたんだ!」とうれしくなってしまいます。これは「私の探鳥地」を持っている楽しみかもしれません。家から近いことがなよりの利点ですが、山、湿地、池、草地がそろっていること、木があまり高すぎないせいか鳥たちを近くで見ることができるのがこの魅力です。

年々、公園の利用者も増えているのでしょうか。整備が進んであちこちロープがはられるようになり、草刈もていねいにされるようになりました。公園として手が入りすぎ、鳥たちの居心地が悪くならないか、少し心配なのですが・・・。今までできてくれた鳥たちが、これからも忘れないで来てくれるようにと願っています。

〒004-0878 札幌市清田区平岡8条4丁目5-17

北海道におけるヒヨドリの繁殖期の分布

藤 卷 裕 蔵

ヒヨドリは北海道で留鳥であるが、ここでは繁殖期における分布について紹介する。

調査方法、使用したデータ、まとめ方については、カケスの分布(121号)とコムクドリの分布(130号)と同じなので、省略する。ただ、調査した区画が2003年に16か所増えている。

最初に分布について、次に環境ごと、標高ごとの生息状況について述べ、さらに暖かさの指数である温量指数と分布の関係についても述べる。

分 布

図1に、10km四方の区画を単位として繁殖期のヒヨドリの分布を示した。北海道北部と渡島半島では記録が少なく空白部が多いが、ヒヨドリは石狩平野、十勝平野などに分布していて、日高山脈、白糠丘陵、大雪山系などの標高の高い山間部、低地でも白糠丘陵以東の釧路地方や北部にはあまり分布せず、観察されなかった区画が多かった。日高山脈と大雪山系を境にして東西の出現率を比べると、西部では61%で東部の45%より高かった。M. ブラジルは、そ



図1. 北海道におけるヒヨドリの繁殖期の分布
一つの区画は、約10km四方で、1/25,000の地形図に相当する
●=生息が確認された
○=調査したが、観察されなかった
・=未調査

表1. ヒヨドリの生息環境別・標高別の出現率 (%)

生息環境	調査路数	標高 (m)					計
		~200	201~400	401~600	601~800	801~	
ハイマツ林	13	—	—	—	—	0	0
常緑針葉樹林	13	100	6	0	0	0	23
針広混交林	127	50	17	16	0	8	20
落葉広葉樹林	125	55	42	13	50	0	44
カラマツ人工林	23	56	55	33	—	—	48
農耕地・林	175	68	88	29	0	—	71
農耕地	191	51	46	50	—	—	50
住宅地	24	76	100	0	—	—	70

の著書「The birds of Japan」で、北海道におけるヒヨドリの主要な分布域は、北限は石狩平野、東限は十勝地方と述べている。今のところ石狩平野より北部の観察記録がほとんどなく、この地域でヒヨドリが少ないのかどうかははっきりしていないが、図1からは少なくとも上川盆地までと北見・網走地方には普通に分布しているように見える。この点を明らかにするには、今後北海道北部・北東部における観察記録の蓄積が必要である。

生息環境

生息環境については、8つに区分し、環境別、標高別に出現率（全調査路数に対するヒヨドリが出現した調査路の割合）を表1に示した。

生息環境別に出現状況を見ると、ハイマツ帯では観察されず、それ以外のタイプの森林、農耕地・林、農耕地、住宅地で見られた。出現率は、常緑針葉樹林と針広混交林ではそれぞれ23、20%とあまり高くなく、落葉広葉樹林とカラマツ林ではそれぞれ44、48%と高くなった。出現率は、

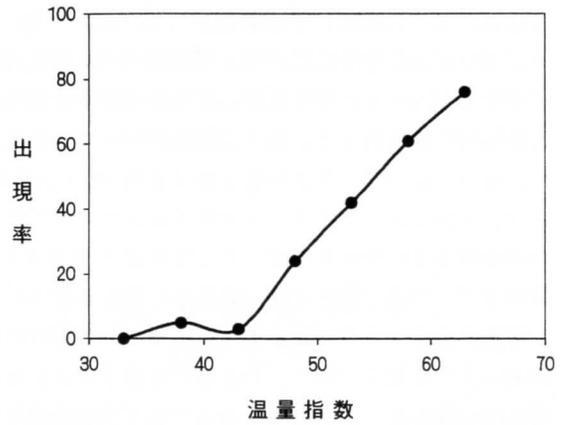


図2. 温度指数とヒヨドリの出現率の関係

農耕地・林で71%、住宅地で70%、農耕地で50%で、森林よりも高かった。ヒヨドリは樹上に営巣し、森林の鳥のグループに入るのに、森林以外の環境に多いという変わった特徴をもっているといえる。

標高別で出現率を見ると、どの生息環境でも出現率は標高が高くなるにしたがって低くなる傾向があった。なお、各生息環境において出現した最高地点は、常緑針葉樹林で190m、針広混交林で850m、落葉広葉樹林で650m、カラマツ林で430m、農耕地・林で420m、農耕地で420m、住宅地で450mであった。

上述のように、出現率が西部から東部にかけて低くなること、また標高が高くなると低くなることの二つの現象を統一的にみるために、西部から東部に向かうにしたがい、また標高が高くなるにしたがって小さくなる温度指数*とヒヨドリの出現率との関係を試みた。図2に示すように、温度指数が40以下で出現率は非常に低く、50以上で温度指数と出現率との間にはほぼ直線的な関係が見られた。

一般に鳥類は恒温動物で気温の影響を受けにくいとされているが、このような出現率と温度指数との関係をみると、鳥類でも暖かさは種の分布に影響しているといえるだろう。北海道ではヒヨドリと同じように東部になるにしたがい垂直分布の下限が低くなる現象がマヒワ、ウソ、ミソサザイでも知られているが、これも暖かさの変化が関係していると思われる。ただし、暖かさがこれらの鳥類の生息に直接影響しているのではなく、暖かさの変化に対応して低標高地から高標高地にかけて、また西部から東部にかけて変化する植生・森林タイプを通して間接に影響していると考えられる。一口に「北海道」といっても、面積はかなり広く、鳥の分布に南北・東西の違いが見られる現象は興味深い。

* 温度指数とは、観測地点の月平均気温が5℃を越えた月の5℃を越えた部分を12ヶ月分積算した数字で表される。おもに植物関係で暖かさの指数として使われている。

〒072-0005 美唄市東4条北2丁目6-1

霧多布鳥案内

片岡 義廣

釧路と根室の間に位置する霧多布、ここで野鳥を見ながら暮らして19年になる。道東には魅力的な探鳥地として知られるところが数多くある。それなのに、霧多布に来てから他の地に鳥を見に行ったことはほとんどない。これは私の出不精のせいもあるけれど、霧多布で見てやろうとのこだわりがあるからだ。

ここでの魅力、それは環境の多様性にあると思う。外海、湾、港、岬、浜、湿原、沼、干潟、それに針広葉樹林の森と高い山や溪流以外はなんでもござれ。おかげで現在までに記録された野鳥は309種にもなった。どこそで、あれが出た、これが出た、と聞かされても、そのうち霧多布でも出るんじゃないの、との思いがある。実際は後でくやしき思いもするのだが、なんでも出る可能性がある環境がそろっている、これが霧多布の最大の魅力と言えると思う。

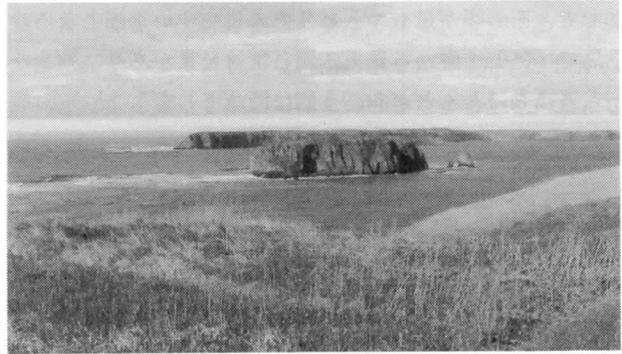
霧多布の日々の自然は、ホームページ「えとぴりか村から」内の「なもけもの日記Ⅱ」をご覧ください。

<http://www5b.biglobe.ne.jp/~pirika/>

アゼチの岬でエトピリカ

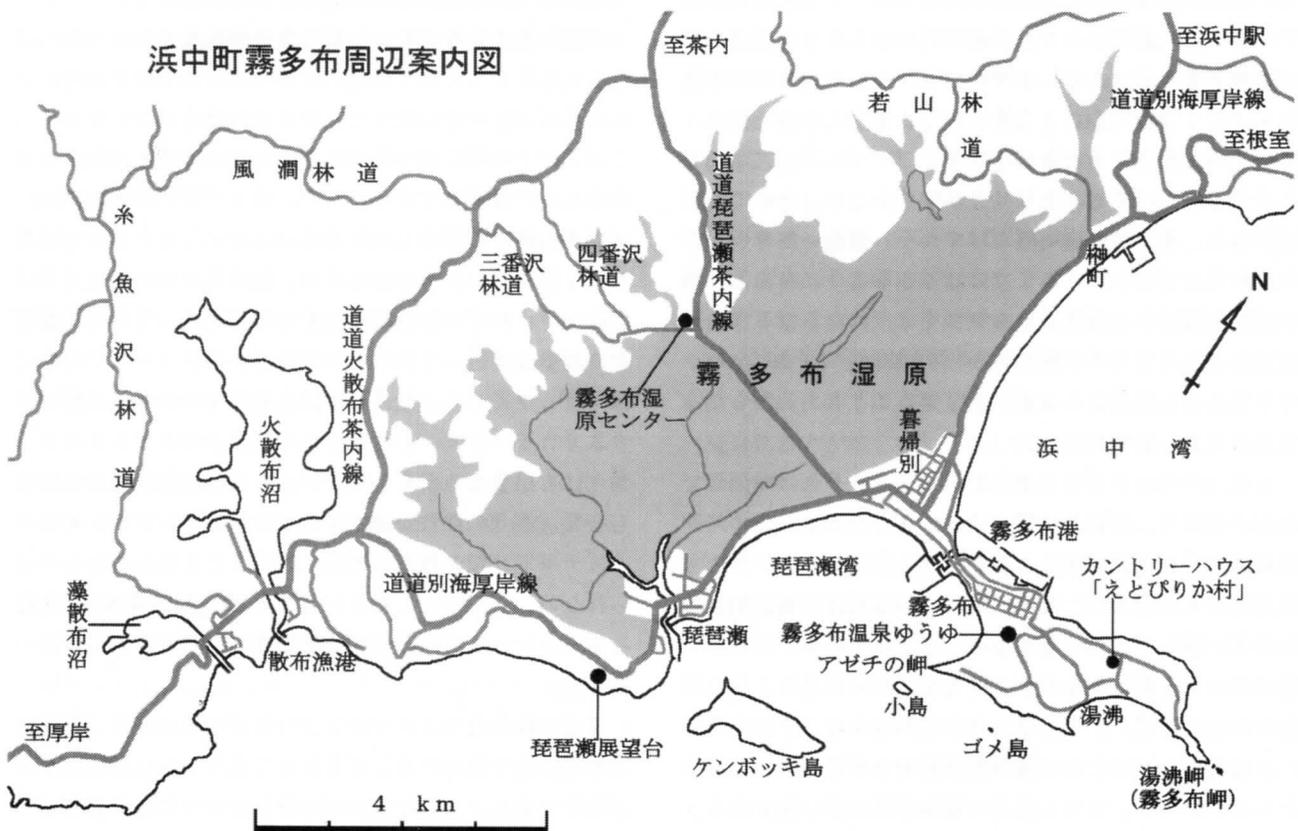
霧多布の鳥、といえばエトピリカを思い起こす野鳥ファンがほとんどだろう。他の野鳥は別のとこで見られても、

エトピリカはここだけが陸から見ることのできる唯一の繁殖地なのだから。実際に霧多布に野鳥を見に来る人は、エトピリカを目的に6月から7月に訪れる人が最も多いのである。



アゼチの岬から望む小島

エトピリカの生息地は岬の台地西端に突き出たアゼチの岬の500m沖に浮かぶ小島、南北100m弱東西200m弱の名前どおりの小さい島である。ここで、わずか1ペア！が5年つづけ繁殖している。じつはそれ以前の3年間は繁殖するものではなく、わずか1ペアとはいえ再繁殖に歓喜したものだ。以前霧多布にどれぐらいのエトピリカがいたかはっ



きり分かっていないが、40年以上前には100羽程度が飛来していたと考えられている。繁殖数は1ペアと書いたが近年は繁殖前の若鳥が飛来するようになり、03年の一度に見られた最大数は9羽であった。92年頃の確認数が2羽だったのに比べ、わずかながら増えてきているが、今だ絶滅の危機にあるのがエトピリカの現状といえよう。

繁殖しているエトピリカは4月下旬から5月上旬に小島に飛来し、8月下旬ころに子育てを終え外洋に去っていく。数が増えてくるのは若鳥が飛来し始める6月から8月上旬までで、その頃が最もエトピリカの見やすい季節となる。小島ではアゼチ岬から見える側と反対に巣があり、残念ながら若鳥もほとんどが向こう側に降りてしまうことが多い。



海上のエトピリカ

ではどこを探せばいいのか、ポイントは島の左側の海上である。島の左下から沖に向けて岩礁が点在し白波が立っていることが多く、その向こう側をスコープで丹念に探してみよう。時期になるとこの海域にはエトピリカ誘致のために海上デコイ（人形）が浮かべられる。そのそばに本物のエトピリカがいることも多いので、まずこの海上デコイを探すのもポイントとなるだろう（二体一組になっている）。ようやく見つけてもエトピリカは遠く小さい。それでも見続けると、赤い嘴や白い顔だけでなく、黄色い飾り羽がだんだん見えて来る。そこまで確認できるようになると、鳥を何度も旋回する飛び姿にも気づくようになるだろう。運が良かったらアゼチの岬と小島の間を旋回してくれて、バッチリ見えるトロピカルな姿に感激することもあるから粘って見ることも必要だろう。

もう一つのエトピリカを見るポイント、それは時間帯である。ずばり、早朝から朝、それに夕方である。この時間帯にエトピリカが集まることと、澄んだ空気でカゲロウもなく見やすいからだ。とくに晴れている時は早朝が順光になり赤い嘴もバッチリ見えるだろう。日中にエトピリカを見に来る人も多いようだが、ほとんどの人は見ることはできなかったと聞く。それは、日中に飛来することが少ないことに加え、遠いために海面の反射やカゲロウでも分らないからだ。さらに最大の難関が夏に多い霧である。突然霧に切れ目ができて見えることもあるけれど、時には

何日も続くこともありこれだけは天任せ、雨男や雨女との同行を避け日ごろの行いを良くしてから訪れましょう。

エトピリカを探しながら海上を見ていると他の海鳥にも気がつくはずだ。小島で繁殖しているオオセグロカモメにウミウ、岩礁近くに浮いているのはシノリガモ。細身の黒いのがケイマフリ、ずんぐりしているウトウ、たまにはとつても小さいウミスズメに、黒白のはっきりしたウミガラス。夏でもウミバトやツノメドリが出たりするので丹念に探すことをお勧めしよう。沖合いにもハシボソミズナギドリやトウゾクカモメ類が続々と渡って行くこともあるので注意が必要だ。

アゼチ岬の後背地にはノゴマやシマセンニュウ、オオジュリンやオオジシギなど草原の鳥、頭上にはアマツバメやショウドウツバメ、時には小島のオオセグロカモメを襲うオジロワシ。エトピリカがたとえいなくても、待つあいだ退屈はしないはずだ。

なお、小島のエトピリカは地元の浜中町で保護しており、環境省のエトピリカ保護増殖事業の対象地にもなっている。繁殖地の小島への立ち入りが禁止になっているだけでなく、船での観察や撮影も禁止にし保護をしていますので守っていただきたい。

夏と冬におすすめ霧多布岬

岬の台地の東端に突き出た岬、正式には湯沸岬というが、現在は観光用につけた霧多布岬として知られている。ここでは台地全体と霧多布岬の野鳥をご紹介します。

以前は霧多布岬にもエトピリカの繁殖地があったため訪れる人も多かったが、最近の夏シーズンはアゼチの岬に比べ鳥見の人は少ないようだ。でもそれはもったいない。ここはアゼチの岬に比べ外洋に突き出ていることがあって海鳥を見るには適しているからだ。ウトウやケイマフリなど、アゼチの岬でご紹介した海鳥もはるかにこちらの方が距離も近く見やすい。そのためには、駐車場から湾を覗くだけではなく、わずか10分程度だから灯台を通過して岬の先端までの遊歩道を行ってほしい。先端部からスコープで丹念に探せば、ウミスズメ類のほかにも越夏中のオオハム類やアカエリカイツブリ、6月だったら岩礁上のメリケンキアシシギにも出会えるかもしれない。ただし海鳥を見るには運も必要。渡りの群れが通る日に当たればヒレアシシギ類やミズナギドリ類の数万の群れに出会うこともあるからやめられない。こちらでもたまにはエトピリカが浮かんでくることもあるし、日中に順光になるのでぜひ訪れてみるとよいだろう。

初夏の岬の台地はエゾカンゾウなど草花が多く、湿原とは違い間近で見られることもあって花ファンには魅力がある場所である。ここでもノゴマやシマセンニュウなどの小鳥やオオジシギなど草原の鳥たちも楽しめるので歩いてみ

るのも良いだろう。

個人的には霧多布岬や台地は冬が最も楽しいところだと思う。何が来てくれるのかワクワクする季節だからだ。暖冬だった今年の冬は海が凍ることはほとんどなかった。それに比べ昨年の冬は寒さが厳しく、とくに厳冬期は沖合いまで所々に開水面があるもののほとんど凍ってしまった。このように、これが同じ霧多布の冬とは思えないほどの違いが年によりあるのである。

ここでは寒かった昨年と暖冬だった今年の冬の状態から、岬と台地の鳥をご紹介します。冬は駐車場あたりから湾を覗くだけで帰ってしまう人が多いようだが、やはり岬の先端部まで行くことをおすすめする。まずはクロガモやコオリガモにピロードキンクロにシノリガモの海鴨たち。昨年はピロードキンクロに混じるアラナミキンクロやシノリガモに混じるコケワタガモが楽しませてくれた。やはり寒い冬のほうがいようだ。暖冬の年にはもっと南下するはずのアカエリカイツブリが多くアビ類も残っている。ウミスズメ類はやはり遠いが、岬正面からとくに右側を丹念に探してみよう。2月から3月が最もよいのだが、なによりも波がないベタ風の日がよい。昨年より今年のほうが少なく、やはり寒い冬のほうが数は多いようだ。ただ種類は変わらず、ウミガラス・ハシブトウミガラス・ケイマフリ・ウミバト・エトロフウミスズメ・ウミスズメ・コウミスズメが見られたのでじっくり探してみよう。

冬の台地の上は小鳥の姿は少ないが、このような環境にいるハギマシコだけが目につく。昨年は800羽、今年は200羽と違いがあったが、小鳥の場合は寒暖より北方の餌の具合による影響が大きいかもしれない。また雪の後には、ツメナガホオジロやユキホオジロにキレンジャクもいたりしたので注意が必要だ。

岬の台地の主役はなんといっても猛禽類だろう。オジロワシ・オオワシ・トビ・ノスリ・ケアシノスリ・ハヤブサ・ハイロチュウヒ・コミミズクが冬の常連さんになる。昨年はケアシノスリが8羽と多だけでなくシロハヤブサやシロフクロウも見られ最高の年であった。暖冬の今年が目玉は吹雪きの後の10羽前後のコミミズクと、天気が荒れることの多い暖冬にも思いがけない出会いがあったりする。このような出会いは一箇所ですぐ根気よく待つのもよいし、岬上の道を何度も回ってみるのもいいだろう、後は運まかせ。

霧多布湿原と海辺

湿原はなんといっても6月から7月の初夏がいい。霧多布湿原は3,160haもある花の湿原だ。何度見ても琵琶瀬展望台から見る広大な風景には圧倒される。ここはラムサール条約の登録地になっており、道立自然公園や国設鳥獣保護区の特別保護区に広い範囲が指定されている。したがって自然を楽しむのは道路上や木道のみに限られ湿原内は保

護されている。私としては、今ブームのカヌーも水鳥には決してやさしくなく、保護区内の河川ぐらいい規制があってもいいと思っているのだが。

花の時期は草原の鳥の季節、ここでは岬同様にノゴマ・シマセンニュウ・オオジュリンなど北海道らしい鳥が満喫できる。岬の草原と違うのは、こちらにはマキノセンニュウが多いことだ。多いといってもブッシュに隠れてなかなか出てこない、いつ出てくるか花園でじっと待つのもいいのではないだろうか。そういった草原の小鳥が多いのは湿原の海側で、中央部は極端に少なくなる。海側にある道路の駐車帯やじゃまにならない所に車を止めて待つのもよし、仲の浜にある木道を歩いて探すのもまたよしといったところだ。

この湿原や周辺の湿地ではタンチョウをはじめ、マガモ・オカヨシガモ・カワアイサ・アカエリカイツブリ・オオバン・バン・クイナ・オオジシギ・アカアシシギ・イソシギ・コチドリなどの水鳥が繁殖している。琵琶瀬川の河口ではタンチョウの姿も見えやすいし、時には大空を舞うオジロワシやヒラヒラ飛ぶチュウヒを見ることもある。河口はコンクリートの堤防で固められてしまい個人的には残念に思っているのだが、皮肉なことに堤防の上でできた道路からは鳥が見やすく探鳥ポイントになっている。

春秋の渡りのシーズンはこの琵琶瀬の河口が最もおもしろい時期で、とくに秋には種類も多く寄ってみる価値があるはずだ。ただ干潮時に水鳥たちが集まる傾向があるので潮見表で確認していくといいだろう。群れなす淡水鴨たち、時にはヒシクイの群れ、干潟にはトウネンやメダイチドリなどの小型のシギ・チドリやアオアシシギやツルシギなどの内陸を好むシギたち、その向こうには巨大なタンチョウが闊歩し、オジロワシやオオタカが鴨たちを飛ばす、こんな光景が珍しくなく広がっている。ここではオオハシシギやコキアシシギやハリモモチウシヤクも記録されたりして、私の秋の定番の場所となっている。小型のシギやチドリは霧多布港内に入る干潟や南北にある浜がおもしろい。ただ最近は潮干狩りの人出などで居着きが悪く、数も種類も減少傾向にあるのが残念だ。それでも距離が近くじっくり見られるのが嬉しいし、時にはアジサシやミツユビカモメの大群やホイグリンカモメも出たりで楽しいところだ。

冬の湿原は小鳥の姿もほとんどなく寂しい。河口もほとんど凍りカモたちもとても少ない。時に舞うワシたちやタカ類が期待できるぐらいだろうか。この時期は浜側の荒地が小鳥のポイントになる。ユキホオジロやベニヒワの群れにツメナガホオジロ、時にシラガホオジロやハマヒバリにコヒバリなど珍鳥も期待できるところだ。ただ彼らはとほほしい餌を求めながら移動を繰り返し、広い浜で出会えるかどうかは運しだいとなる。

キバシリ科 キバシリ メジロ科 メジロ ホオジロ科 シラガホオジロ ホオジロ ホオアカ コホオアカ カシラダカ	ミヤマホオジロ シマアオジ ズグロチャキンチョウ アオジ クロジ オオジュリン ツメナガホオジロ ユキホオジロ アトリ科 アトリ	カワラヒワ マヒワ ベニヒワ ハギマシコ オオマシコ ギンザンマシコ イスカ ベニマシコ ウソ イカル	シメ ハタオリドリ科 ニュウナイスズメ スズメ ムクドリ科 コムクドリ ムクドリ コウライウグイス科 コウライウグイス	カラス科 カケス ホシガラス ニシコクマルガラス*6 ハシボソガラス ハシブトガラス ワタリガラス 以上 309種
--	---	--	---	--

*85～03の片岡の記録とその間に集まった情報に加え、浜中在住の中田千佳夫氏の記録(74～79)、および同じく浜中在住の黒沢信道氏の記録(79～86)からもリストアップした。

山と呼ばれる森

湿原の裏から厚岸湖まで針広葉樹林の森が広がっている。海拔0mに近い霧多布の住民からは山と呼ばれているが。実態はせいぜい標高70mぐらいの丘が続いているだけだ。霧多布は夏の北海道で最も寒冷なところのひとつ。それは寒流から押し寄せる海霧のせいで、平地にも関わらず広葉樹ばかりではなく針葉樹も発達している。

ここでの夏の野鳥の特徴は低地の鳥から亜高山に近いとこまでに住む鳥が同居していることだ。湿原脇の低木にはエゾセンニュウやベニマシコやアリスイなど、広葉樹林にはキビタキやセンダイムシクイなど、針葉樹が増えるにしたがいコマドリやルリビタキにウソやキクイタダキなどが生息している。ここではハイ松帯に住むギンザンマシコやホシガラスなどや、溪流を好む鳥を除くほとんどの山の野鳥がいると言っても過言ではない。もちろんクマゲラやヤマゲラやエゾライチョウなど北海道らしい鳥もこの森で見ることができる。ただここは北海道でも有数の広い平地の森、歩ける距離は限られているから出会うかどうかはやはり運しだい。

浜中町内のこの森には車で通れる4本の開放林道がある(地図参照)。東から若山林道、三番沢林道、風潤林道、糸魚沢林道とあるが、西側に行くにしたがい森が深くなる傾向がある。風潤林道と糸魚沢林道は現在も造林が行われていることもあって比較的整備がされてはいるが、林道は林道、嵐の後には道が荒れていたり通行禁止のこともあるので注意が必要だ。とくに若山林道と三番沢林道は道も狭く、一部荒れてるともあるので運転は慎重にしてほしい。これらの林道を車で流したり、よさそうなとこに止めてみたり、時に歩いてみるのがいいかもしれない。ゲートのかかった枝道やこれ以外の林道は車の進入は禁止だが、徒歩で入ることは禁止されていない。このような林道の方が鳥が多かったりするのだが、草が生えてるような古い道はダニが多くおすすめできない。

歩くことが好きな方は湿原センター近辺の三番沢から四番、五番沢林道が手ごろでいいかもしれない。詳しいコースは歩く時間を考え湿原センターでコースを尋ねるといいだろう。ただこの森はヒゲマの住み家、人的被害は聞いた

ことはないけれど、やはり注意は必要、準備や行動を慎重にしてほしい。

[注] 表中の鳥の*1～*6については日本鳥類目録(日本鳥学会 2000)や北海道鳥類目録(藤巻 2000)で日本の鳥あるいは北海道の鳥としてまだ認定されていない。写真などの具体的証拠に欠くものもあるが、参考までにそれぞれにつき以下の注釈を付しておく。

- 1) カタシロワシ: 92年2月16日、97年12月～98年1月に霧多布岬などで観察された。92年と98年には隣接する根室市でも記録されている(高田 2001)。
- 2) ヒメカモメ: 91年6月28日に霧多布岬で観察された。80年8月の根室市落石岬での記録がある(高田 2001)。
- 3) カナダカモメ: 01年1月3日に琵琶瀬で観察された。98年12月の根室市春別川河口での記録がある(高田 2001)。
- 4) ホイグリンカモメ: 毎年9月～10月にごく少数が定期的に霧多布海岸を通過する。1996年9月の斜里町での記録がある(川崎 1997)。
- 5) コバシウミスズメ: 86年3月27日に埼玉県野鳥の会会員により霧多布岬で観察され、同年3月30日の北海道新聞に掲載された。
- 6) ニシコクマルガラス: 96年7月～97年3月に霧多布市街などで観察され、文一総合出版のバーダー誌13巻2号(1999)に掲載された。

参考資料

川崎康弘(1997) 網走市・小清水町・斜里町におけるオホーツク海沿岸部周辺の鳥類. 知床博物館研究報告 18: 19-34.
 高田令子(2001) 根室支庁管内鳥類リスト. 根室市博物館開設準備室紀要 15: 95-114.
 日本鳥学会(2000) 日本鳥類目録改訂第6版.
 藤巻裕蔵(2000) 北海道鳥類目録改訂2版. 帯広畜産大学野生動物管理学研究室.

〒088-1522 厚岸郡浜中町湯沸157番地

コムクドリ脚環付けのこと

早瀬 廣司

コムクドリの会

我が家の隣の南部正夫さん（建設会社の社長）の庭にかけた巣箱に偶々コムクドリが入った。その翌春同業の出村さん、小鷹さんに巣箱を作ってそれぞれの家で付けたところ、すべての巣箱にコムクドリが入り、どこの家でも入ると確信出来た。そこで南部さんのところで、端材を活用して作った巣箱を近所や知人に配って、昭和61（1985）年コムクドリの会が結成され、会長に南部さんがなった。会員は巣箱を無償で貰い、何処に付けたら良いかのアドバイスをうける。自信のない人は取り付けて貰う。特に山の手小学校と山の手南小学校に巣箱を寄付して取り付け、賛助会員に加わって貰った。非常に自由で特別な義務、制約はない。年に1度か、2度の総会に出てそれぞれの家のコムクドリはどうであったかと情報交換しながら酒を飲む。

会員の間で気軽に電話してコムクドリの情報を取り交わし、我が家のものと比較したり、後に述べるような脚環付けの適期を判断することができた。またカラスによる営巣妨害とその対策を考える機会もあった。これらのことについて順次述べていきたい。

コムクドリの脚環付け

竹中万紀子先生との出会い

私はコムクドリの研究をしている新潟の小池重人さんと連絡していろいろ文献を頂いていた。1992年5月初めのNHK第一放送で7時45分からの自然情報に竹中万紀子先生がコムクドリの話をした。地元の札幌の北海道東海大学でコムクドリの研究をしていることを知り、早速、電話連絡して東海大学に行った。そして同大学構内で巣箱の設置状況を見せていただいた。その後竹中先生の研究報告、著書を頂き、いろいろ話し合いをした。竹中先生は環境庁に脚輪を付ける許可をとる手続きをし、来年度から実際にコムクドリの脚輪を付けたいと聞いた。私は翌春から山の手のコムクドリの会の人に連絡して協力する約束をし、1993年から1998年の6年間協力した。

コムクドリの脚環

コムクドリの巣箱を付けている家の人はずべて脚環付けに賛成するとは限らない。第一に巣箱の蓋を開けて中を覗くことは鳥の秘密、権利を侵すことで繁殖行動を乱し、折角入ったコムクドリが巣を放棄するかもしれない。またコ

ムクドリに脚環を付ける過程で身体に傷を付けたり、痛めたりする不安を感じ、コムクドリ同士の間で殺し合いが起きるかもしれないとの危惧を抱き、断られた。

4月中・下旬渡来したコムクドリが庭に設置したリングの餌台に取りつき飢えを癒し、体力を回復する。会員はその渡来を電話で連絡しあう。

メス、オスのつがいの形成、巣材運び、餌運びは室内からも容易に観察できるが、親鳥の脚環付けの適時を決めるのに重要な産卵（初め、終わりと数）は実際に巣箱の蓋を開けて確かめる必要がある。餌を運び始めた観察結果を聞いてからヒナの脚環付けの適時を推定し、竹中先生に電話連絡して日にちを決める。竹中先生は東海大学の講師をしていて、授業、研究、実習などで多忙のため、一週に半日ぐらいしか都合が付けられない。脚環付けの適時は親鳥では抱卵をはじめて10～12日位が最も長い間巣に居る時で、ヒナは孵化後10～14日目最もよいが、少し早く一週くらいでも付ける。脚環を付けるには、親鳥の場合メス親かオス親が巣箱に入って卵を暖めていることを確かめ、まず巣穴を網で塞ぎ、上蓋を開けて捕まえる。親鳥の脚環を付けに行ったとき親鳥が巣箱に入っていないことがあり、10～20分間待つ必要がある。しかしその時間がないので仕方なく断念したこともある。また片親鳥に脚環付けを終わって帰る前に運良く他の親鳥が巣箱に入ってオス・メスともに脚環を付けることができたこともある。不幸にして一度親鳥の脚環付けに失敗すると、再度捕らえて脚環付けが困難になる。他方ヒナの脚環付けは一回行けば必ずヒナの数だけ付けることができる。従って親鳥の脚環付け数はヒナに比べて少ない結果になる。

1993年から1998年の間に脚環をつけたコムクドリの羽数を表1に示す。

表1 脚環を付けたコムクドリの数

年 度	手 稲 ・ 山 の 手 地 区				総羽数
	巣箱数	オス	メス	ヒナ	
1993	5	2	1	29	32
1994	6	1	2	35	38
1995	7	4	3	32	39
1996	7	0	0	34	34
1997	16	4	3	74	81
1998	20	7	12	80	99
計	61	18	21	284	323

私の担当した手稲・山の手地区の脚環付けは、最初の4

年間は大体30~40羽であったが、後の2年間はそれぞれ81羽、100羽と飛躍的に沢山付けることができた。それはコムクドリの会の多くの巣箱が蓋を釘付けから蝶つがいの蓋に替え、脚環を付ける協力者が増加したためである。

脚環をつけたコムクドリの再渡来

竹中先生は右脚に上下、左脚に上下と計4個のカラーリングを付けた。カラーはY:黄色、R:赤、P:ピンク、B:濃紺、b:水色、O:オレンジ、G:緑、g:薄緑、W:白等である。色の組み合わせで個体識別できるが時が経つと色があせて判らなくなることがある。また外れるリングもある。抱卵中の親を捕まえるのが良い。餌運びしている時期は止まり木がなければ確認が難しい。

他方、2000年4月30日、餌台でリングを食べている時に吉田さんが脚環付けから7年以上のオスを営巣前に、早瀬は2000年5月1日、同じく7年のメスを双眼鏡で確かめた。前述の小池さんも1991年に7年以上のオスを確認し、コムクドリは長生きであることがわかった。

西区と手稲区において私の関係のコムクドリの再渡来を確認できたのは表2のようにになっている。

カラーリングとメタルリング

日本野鳥の会の会員土屋文男博士は、1975~1977年の3年間に藤の沢小鳥の村でコムクドリのヒナ100羽にメタルリングをつけ標識放鳥した。双眼鏡による観察で、メタルリング付きのコムクドリが1977年5月25日に豊平区平岸1条5丁目3の木内栄さんの餌台にきているのを、また1977年5月、南区真駒内旭町5丁目の巣箱で営巣しているのを斉藤春雄、土屋文男両氏、藤の沢小学校の児童6名が観察した。

1999年春私は80歳になり、いつまでコムクドリの脚環付けを継続できるかは不安になった。しかし、コムクドリの脚環付けを継続することは有意義だ。竹中先生に連絡して

代わりに武本行和先生にしてもらうことにした。武本先生は盤溪小学校の教諭で、日本野鳥の会札幌支部の幹事をしており、また山階鳥類研究所の協力調査員である。その脚環は藤の沢小鳥の村と同じアルミニウムメタルである。だが、双眼鏡で右脚に付けたリングの太陽光で輝きを見ることはできるが、捕獲して番号を確認するのではなければ個体識別できない。他方カラーリングでは上下左右組み合わせで個体識別できるが、竹中先生個人の研究で他人は容易に知ることができない。1996年秋、西区某氏の庭でコムクドリの死体が見つけれられ、付けられていた4個のカラーリングだけ送付されてきたが、左右、上下の順序が不明で個体を決めることはできなかった。それに対しメタルリングは山階鳥類研究所に問い合わせが可能である。実際、渡りの途中の2001年10月4日に鹿児島県大島郡知里貫(沖永良部島)の隈元昭枝さん宅の裏庭で発見された。この鳥は1999年6月19日に三角山小学校の藤棚にかけられた巣箱で孵化し、その後2回日本に帰ってきて、また越冬地へ向かう途中命を落とされたと思われる。

武本先生はなかなか積極的にコムクドリが渡ってきてから会員に直接電話して脚環付けの適時を決め、朝早く出勤前また帰り道で脚環付けに行く。それで私達が脚環付けたときよりも親鳥に多く付けている。例えば2002年に早瀬宅の巣箱で営巣のオスは1999年6月5日に斉藤宅(西区)で脚環とつけたヒナ(4B-75594)で、メスは2001年6月5日の曾我宅(西区)でのヒナ(4B-75578)であること、また斉藤宅の巣箱で1999年、2000年、2001年の3年間営巣していたメスは、1998年6月12日の山の手南小学校でのヒナ(4B-75671、BBYD)であることが確認されている。

カラスによる営巣妨害

コムクドリがヒナを育てる時期は、カラスとほぼ同じである。そのせいか、カラスによる営巣妨害が多い。1980年代後半に、山の手小学校の巣箱から巣立ったヒナが近くの

表2 コムクドリの再渡来

脚 環 付 け				巣 箱 の 場 所	目 撃 し た				
カラー	年度	月日	親ヒナ		年度	月日	年齢	性	場 所
RRYR	1993	6/11	ヒナ	早瀬(西区山の手)	1996	5/05*	4年	♀	吉田(西区西野)
RRWR	1993	6/15	ヒナ	出村(西区宮の沢)	1998	5/24、6/02	6年	♂	東海大学(南区南沢)
RYBW	1993	6/25	ヒナ	東海大学(南区南沢)	1998	4/22、4/23	5年	♂	早瀬(西区山の手)
YRRY	1994	6/06	♂親	東海大学(南区南沢)	2000	4/30	7年+	♂	吉田(西区西野)
RWBB	1994	6/20	ヒナ	東海大学(南区南沢)	2000	5/06	7年	♀	早瀬(西区山の手)
WGgb	1995	6/06	ヒナ	西村(手稲区手稲本町)	1998	6/02	4年	♂	東海大学(南区南沢)
RYGR	1996	7/02	ヒナ	東海大学(南区南沢)	2000	4/30	5年	♂	吉田(西区西野)
WGbO	1997	6/17	ヒナ	山の手小学校(西区)	1998	5/01	2年	♀	早瀬(西区山の手)
RWbb	1998	6/02	♂親	山の手小学校(西区)	2000	5/05	3年+	♂	早瀬(西区山の手)
RBgW	1998	5/29	♂親	山の手小学校(西区)	2000	5/06*	3年+	♂	山の手小学校(西区)
RbbR	1998	6/09	ヒナ	吉田(西区西野)	1999	5/31	2年	♂	栗村(西区山の手)
PPWB	1998	6/22	ヒナ	山の手小学校(西区)	2003	5/03、5/09	5年	♀	早瀬(西区山の手)
BBRY	1998	6/12	ヒナ	山の手南小学校(西区)	1999	5/03*	2年	♀	斉藤(西区山の手)

*: 巣箱でつがいになり、ヒナを育てた。 +: 以上
(脚環付けデータおよび東海大学における目撃データは竹中先生の未発表記録による。)

垣根に飛んで行ったのを、カラスが捕まえて飛んでいくのを私は見た。

山の手の奈良さんの家はゴミステーションの近くで、その巣箱はよくカラスに襲われる。1994年、奈良さんと佐藤さんの庭の巣箱は、カラスに襲われて巣立ちができなかった。1996年6月13日の午後2時頃には、奈良さんの目の前で、1羽のカラスが飛んできて、餌運びをしていたメスの親鳥を捕まえて食べてしまったそうである。

2003年6月の餌運びの時期には、奈良さんの留守中にカラスによって巣箱の上蓋の留め金が外され、中のヒナ1羽が外に放棄され、メス親が来なくなった。それで、留め金を針金でしっかり縛りつけた。また山の手の吉田さん宅の巣箱では、家族の留守中に釘付けの上蓋をはがされて、中のヒナすべてが持ちだされてしまった。我が家ではカラスがしばしば巣箱の上の止り木に止るのを見ている。同年6月11日には、早朝4時10分、5時5分、5時30分にカラスが上蓋に止って巣箱の中のをぞき込んでいた。こんな早朝から3度もカラスが来るので、対策を講じなければと考えた。

これに先立つ1月、野鳥の餌のための脂肉を目の細かい金網に挟んで白木蓮の幹に付けたことがあった。しかし、ハシブトガラスがそれを見つけ、金網に嘴を突っ込んで少しずつ持っていき、1週間も経たないうちにすべてなくなってしまったことがあった。三角山の麓でリンゴ園を営んでいる齊藤さんが、釣り用のテングスを餌台に張ってカラスの被害を防いだと聞いたので、我が家でも脂肉を前と同

じようにして取り付けてから、その回り上下左右にテングスを張り巡らせた。その効あってか、以後はカラスの被害はなくなった。これを参考に、早朝3度もカラスがきた6月11日の10時過ぎ、巣箱を取り付けた丸太を頂点とした三角形に3本の長い竿を立て、巣箱の上下左右周囲にテングスを張り巡らせてみた。コムクドリのメス、オス親はそれに驚いたのか、はじめは餌を持ったまま飛び回っていたが、30~40分後、まずオス親が止り木に止りヒナに餌をやった。それからはメスもいつも通り餌をやるようになり、またカラスが巣箱近くに来ることもなくなった。隣の南部さん宅の巣箱もたびたびカラスが巣穴を覗いていたので、テングスの効果を伝えた。南部さんが巣箱を中心に周りの枝にテングスを張ったところ、カラスが全く来なくなった。また小柳宅でも同じようにしてカラスの被害を防いだ。

文 献

- 小池重人(1991)コムクドリの生態 渡来時期と常巣場所の確認。野鳥新潟78:2-3。
齊藤春雄(1984)北ぐにの鳥。北海道新聞社。
札幌市立藤の沢小学校(1975)コムクドリの標識放鳥について-1975。
札幌市立藤の沢小学校(1977)コムクドリの標識放鳥について第三次報告。

〒063-0002 札幌市西区山の手2条3丁目5-9

平成16年度 総 会 報 告

日 時：平成15年4月9日(金) 午後6時30分~7時30分

場 所：札幌市民会館 第4会議室

小堀煌治会長の挨拶のあと、議長に戸津高保氏を選出し、議案審議が行われ、原案どおり可決、承認された。

〈議 事〉

1. 平成15年度事業報告

[総 務]

- (1) 野鳥写真展の開催
開催場所：カメラの光映堂フォトギャラリー
開催期間：平成15年5月7日(木)~20日(火)
出 典：11名、21点
- (2) 「野鳥だより」の発送(132号~135号)
- (3) 新年野鳥講演会、スライド映写会の開催
講 師：菊地政光氏「渡島半島の鳥たち」
平成16年1月10日(土)
札幌市男女共同参画センター
参 加 者：60名(スライド提供者3名)
- (4) 愛護会名入りカレンダーの作成・販売(70部)
- (5) 定例幹事会の開催(各月1回、計12回)
- (6) 傷害保険の更新

[広 報]

- (1) 「野鳥だより」132号~135号の発行
- (2) 愛護会ホームページの維持・運営

[探 鳥]

- (1) 探鳥会27回。参加者累計970名(1回平均36名)

[会 計]

- (1) 平成15年度決算報告
- (2) 平成15年度会計監査報告。大野信明・村野紀雄監事から適正に処理されている旨の報告があった。

2. 平成16年度事業計画

[総 務]

- (1) 野鳥写真展の開催
開催場所：カメラの光映堂フォトギャラリー
開催期間：平成16年5月8日(土)~24日(月)
- (2) 「野鳥だより」の発送(136号~139号)
- (3) 新年野鳥講演会、スライド映写会の開催
平成17年1月予定
- (4) 愛護会名入りカレンダーの作成・販売(70部)
- (5) 定例幹事会の開催(各月1回、計12回)
- (6) 傷害保険の更新

[広 報]

- (1) 「野鳥だより」136号～139号の発行
- (2) 愛護会ホームページの維持・運営

[探 鳥]

- (1) 探鳥会27回（道東宿泊探鳥会を含む）

[役員人事]

村田静穂氏（総務）の退任、一部幹事の担当変更が承認された。

[平成15年度役員]

顧問 谷口 一芳、藤巻 裕蔵
 会長 小堀 煌治
 副会長 井上 公雄、戸津 高保
 監事 大野 信明、村野 紀雄
 会計幹事 蒲澤鉄太郎、清水 朋子
 代表幹事 白澤 昌彦
 幹事

（総務）◎中正 憲信、岩崎 孝博、大町 欽子、
 蒲澤鉄太郎、栗林 宏三、佐藤ひろみ

島田 芳郎、松原 寛直
 （探鳥）◎岡田 幹夫、井上 公雄、梅木 賢俊
 栗林 宏三、後藤 義民、佐藤 幸典
 佐藤ひろみ、竹内 強、田子 元樹
 富川 徹、成澤 里美、早坂 泰夫
 渡辺紀久雄、渡辺 俊夫

（広報）◎樋口 孝城、岩崎 孝博、北山 政人
 白澤 昌彦、高橋 良直、武沢 和義
 道場 優、戸津 高保、道川富美子
 山下 茂 （◎印は各担当の代表者）

会 員 数

	11.4.1	12.4.1	13.4.1	14.4.1	15.4.1	16.4.1
個人	330	325	324	339	346	341
家族	33	31	42	46	42	38
団体	2	2	2	2	2	2
	(396)	(387)	(408)	(431)	(430)	(417)

注：（ ）は個人会員数+（家族会員数×2）

平成15年度 決 算 書

(収入の部)

項目	予 算	決 算	増 減	備 考
繰越金	312,203	312,203	0	
個人会費	670,000	642,000	▲ 28,000	入金14名減
家族会費	120,000	132,000	12,000	入金4家族増
団体会費	10,000	5,000	▲ 5,000	1団体未納
参加費	30,000	30,000	0	新年講演会参加者60名
売上金	134,000	130,060	▲ 3,940	野鳥だより カレンダー他
寄付金	0	30,000	30,000	講演 探鳥案内謝金寄付
雑収入	3,797	28,285	24,488	宿泊探鳥会剰余 預金利息
合計	1,280,000	1,309,548	29,548	

(支出の部)

項目	予 算	決 算	増 減	備 考
印刷費	620,000	547,115	▲ 72,885	野鳥だより印刷
通信費	210,000	167,840	▲ 42,160	野鳥だより郵送費
会議費	35,000	39,340	4,340	幹事会、新年講演会
消耗品費	50,000	42,914	▲ 7,086	チェックリスト作成
交通費	16,000	18,000	2,000	野鳥だより発送業務
報償費	92,000	92,000	0	事務所費用 講師謝礼
雑費	70,000	54,184	▲ 15,816	写真展 傷害保険など
予備費	187,000	31,920	▲ 155,080	
合計	660,000	993,313	▲ 286,687	

1,309,548（収入）－993,313（支出）＝316,235（次年度へ繰越）

平成16年度 予 算 書

(収入の部)

項目	本年度 予 算	前年度 予 算	増 減	備 考
繰越金	316,235	312,203	4,032	
個人会費	660,000	670,000	▲ 10,000	330名×2,000
家族会費	120,000	120,000	0	40家族×3,000
団体会費	10,000	10,000	0	2団体×5,000
参加費	30,000	30,000	0	新年講演会 60名×500
売上金	130,000	134,000	▲ 4,000	野鳥だより カレンダー他
雑収入	3,765	3,797	▲ 32	
合計	1,270,000	1,280,000	▲ 10,000	

(支出の部)

項目	本年度 予 算	前年度 予 算	増 減	備 考
印刷費	600,000	620,000	▲ 20,000	前年度実績を考慮
通信費	185,000	210,000	▲ 25,000	前年度実績を考慮
会議費	40,000	35,000	5,000	幹事会、新年講演会
消耗品費	90,000	50,000	40,000	野鳥だより発送封筒 作成
交通費	16,000	16,000	0	野鳥だより発送業務
報償費	92,000	92,000	0	事務所費用 講師謝礼
雑費	70,000	70,000	0	写真展 傷害保険など
予備費	177,000	187,000	▲ 10,000	
合計	1,270,000	1,280,000	▲ 10,000	



野幌森林公園探鳥会

2004. 2. 1

原 美 保

大沢南町のバス停を降りた所から、私の探鳥会は始まります。まだ一人では何の鳥か分からない時が多いですが、今回はシメがじっと止まっていてくれたので良く見ることが出来ました。

集合場所に着くと「フクロウがいるよ。スコープに入っているから見てごらん」と声をかけてくれました。横を向いていましたが、ふっくらと丸い姿が見えました。コースに入ってすぐの木々にカラ類やエナガ、キバシリなどがいましたが、忙しく飛び回っていてなかなか双眼鏡で見られません。首が痛くなり、あきらめます。

冬の森林公園は初めてです。青空と新雪の森がとてもきれいでした。時々枝に積もっていた雪が落ち、雪片が太陽に光にキラキラ輝いて、降る雪とは違った美しさです。そんな雪景色の中を歩くことが楽しくて、先頭を歩いてしまいました。

オオアカゲラが木をつついていました。ドラミングとは違うゆっくりした音で、道のすぐ側でしたのでじっくり見ることが出来ました。桂コースの桂の木でマヒワが実を食べていました。後で落ちている実を教えてくださいましたが、2cm位のさやに小さな種がつまっていた。オスの黄色がきれいでした。コースの最後にはオジロワシが2羽、数羽のトビと一緒に飛んでいるのを見ることが出来ました。大沢入口に戻ると、カメラが5台並んでいました。近くに止まったヒヨドリの声がうるさくて目を開けたフクロウを見ることが出来ました。

森林公園はバスで行けるので、車の無い私には有り難い場所です。野鳥だけでなく新緑、青葉、紅葉、花、雪景色などそれぞれの季節で楽しませてもらいました。

井上さんのご紹介で入会して2年、まだまだ分からない鳥が多いのですが、愛護会の皆さんは親切に教えて下さり、お話を伺うのも楽しみのひとつです。これからもよろしくお願い致します。

〒001-0922 札幌市北区新川2条3丁目4の27

【記録された鳥】トビ、オジロワシ、フクロウ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、マヒワ、イカル、カケス、ハシブトガラス 以上 19種

【参加者】赤沼礼子、今村三枝子、岡田幹夫、香川 稔、

小西美美枝、今善三郎、佐々木優子、佐々木 裕、田中志司子、徳田恵美、戸津高保、野崎莞二、畑 正輔、原 美保、辺見敦子、松原寛直・敏子、安真一郎、山形裕規、山川美香、山口和夫、山本和昭、横山加奈子 以上 23名
【担当幹事】松原寛直、岡田幹夫

円山公園探鳥会

2004. 2. 29

【記録された鳥】トビ、ハイタカ、マガモ、オオセグロカモメ、コゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、キクイタダキ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、カワラヒワ、ウソ、シメ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上 20種

【参加者】赤沼礼子、井上公雄、犬飼 弘、今泉秀吉、岡田幹夫、勝俣征也、亀田容子、後藤義民、小堀煌治、小西美美枝、白澤昌彦・瑠美子、高橋幸子、高橋良直、武沢和義・佐知子、忠地和子、戸津高保、畑 正輔、原 美保、原 芳明、樋口孝城、広木朋子、辺見敦子、松原寛直、山田甚一、柳本 以上 27名

【担当幹事】武沢和義、小堀煌治

ウトナイ湖探鳥会に参加させていただき

2004. 3. 31 松 島 雅 之

久々に北海道野鳥愛護会の探鳥会に参加をさせていただきました。南国生まれ南国育ちの私にとって冬の雪道はやはり恐ろしいもの、やっと来た春に誘われて重い腰を上げたと言うわけです。

天気も最高、気温もすっかり春のそれとなり分厚いコートを着て来たのが恥ずかしいような探鳥日和です。湖の氷も「例年になく解氷が遅れて……」と言う昨年探鳥会報告と正反対の「例年に無く解氷が進み……」と言う状態で、遥か彼方に後退していました。気象情報で言うところの「超暖冬」を裏付けているような風景です。

この時期に期待できる鳥は何がいるのでしょうか、やはり筆頭に上げられるのはマガンとヒシクイですよね。しかし、ここウトナイ湖では距離が遠すぎます、ヒシクイはともかくマガンの大部分は遥か彼方の美々川流入口あたりに大部分が羽を休めているようです。何時も不思議に思うのですが、全く同じような環境で生活している両者なのに、人が近寄ると飛び立ってしまう「警戒距離」が全く違うのはなぜでしょう、理由は「マガンは美味しいけど、ヒシクイは不味い」だったりして、勿論冗談ですが。

その他に今回個人的に期待している鳥がいます。冬の間

ほとんどの時間勇払や鶴川の海岸線で鳥見をしてきたため、林の小鳥達と随分ご無沙汰をしていました、だからマヒワや特にアトリには是非とも出会いたいものです。

歩き出して間もなく岸辺の林にカシラダカを見つけた方がいて双眼鏡で探していると「あっマヒワもいる」との声、マヒワの黄色が光線の具合でとても美しい、「お前はこんなに美しくて本当に保護色しているのか？」と声をかけたくくなります。カシラダカは既に夏羽に換羽中、頭が少し黒くなり始めていました。こうやって皆様と歩いていると自分ではなかなか見つける事の出来ない鳥達を沢山見ることが出来、「他力本願鳥見？」を目指す私にとって本当に至福の一時でした。

ただ一つ残念なのは、自分では見る事の出来なかったアトリが鳥合わせで出ていました。他力本願では行列のどの位置にいたかで、運不運が変わってきます、やはり日頃から自分の実力を磨き、自分で見付けられる努力をしなくてはと反省の一日でもありました。

〒053-0022 苫小牧市表町5条7丁目6

メゾンドグレース305

【記録された鳥】カイツブリ、ダイサギ、アオサギ、トビ、オジロワシ、オオワシ、コブハクチョウ、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒシクイ、マガン、コクガン*、ヒドリガモ、ヨシガモ、コガモ、マガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、キンクロハジロ、スズガモ、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ、ウミネコ、カモメ、オオセグロカモメ、シロカモメ、コゲラ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、カシラダカ、オオジュリン、アトリ、カワラヒワ、マヒワ、ウソ、シメ、スズメ、ハシブトガラス

以上 42種

[注] 鳥合わせの時に入れなかったコクガンを追加しました。湖畔で見られたコクガンは昨年秋に飛来したのですが(その時点ではおそらく迷行)、観光客などによる餌にハクチョウなどと一緒に餌付いてしまい、越冬したものと思われる。本来ウトナイ湖に渡来・生息する種ではないことを付け加えておきます。

【参加者】赤沼礼子、板田孝弘、板垣敦之・嘉子、岩崎孝博、氏家正毅、白田 築、岡田幹夫、岡部良雄、荻野裕子、河野美智子、片山 実、蒲澤鉄太郎・則子、川瀬悌次郎・靖子、川東保憲・知子、北山政人、栗林宏三、小西美美枝、小堀煌治、品川睦生、島田芳郎・陽子、高橋良直、戸津高保・以知子、道場 優・信子、高栗 勇、浪田良三・典子、中正憲倍・弘子、橋爪陽子、原 美保、原 芳明、樋口孝城、山本昌子、松木 修・ゆう子、松島雅之、松原寛直・敏子、山口和夫、山田良造、山本和昭、吉田慶子、横山加奈子

以上 49名

【担当幹事】道場 優、栗林宏三

クマゲラ(♀)に接近遭遇!

2004. 4. 11 藤 澤 豊

今回初めて参加させて頂きました。私たちは厚別区に住んでいることもあり、野幌森林公園は散策によく訪れております。しかし素人の悲しさ、目の前にいる鳥の名前がよくわからないのです。姿はそれでも図鑑を見比べなんとか判別できるようになったのですが、鳴き声になりますとまるでわかりません。さえずりが聞こえ始めたこれからの季節、いろいろ教えて頂こうと家族で参加させて頂きました。

今回の探鳥会ではこの期待にたがわず、参加者の皆様にご指導頂きたくさんの鳥に遭遇することができました。

特に感銘したのがヤマゲラの鳴き声です。図鑑では「ピョーピョピョと尻下がりで鳴く」とされておりますが、実際はもっと抑揚に富んでおり、教えて頂くまではあれがヤマゲラの鳴き声とはわかりませんでした。なんと美しい声でしょう。

声といえば、エゾアカガエルの声も初めて知りました。また、エゾサンショウウオの卵を拝見することもできましたし、エゾリスの飛翔もすぐ近くで観察することができました。これも多くの方が参加する探鳥会ならではのものです。家族3人で漫然と歩いていたのでは、このような訳にはいきません。

探鳥会も終盤、大沢園地を通過する頃、「コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、オオアカゲラとくれば、次は『クマちゃん』に会いたいなあ」との思いが頭に浮かびました。途中、真新しい食跡も多く見ました。期待は大きいものの、無理かなあと歩いてると先頭より「クマゲラがいる!」との声。あわてて駆けつけるといました!クマゲラの♀です。しかも遊歩道からほんの10メートルほどの至近距離で木をほじくっています。まさにクマゲラとの接近遭遇です。夢は叶うものなのです。アイヌの人達はクマゲラを「チブタチカブ・カムイ」と呼んでいました。これは「舟・掘る・鳥・神」という意味だとか。まさに探鳥会に参加された方々の日頃の行いへの森の神様からのご褒美ではないでしょうか。森の神様へ、また、このような機会をつくって頂いた野鳥愛護会の皆様へ感謝、感謝の一日でした。ありがとうございました。

【記録された鳥】トビ、ハイタカ、キジバト、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、クマゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、ミソサザイ、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、アトリ、カワラヒワ、マヒワ、ウソ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上 24種

【参加者】青山洋子、赤沼礼子、板田孝弘、岩崎孝博、太田清美、大塚永利子、岡田幹夫、勝見輝夫・真知子、蒲澤

鉄太郎・則子、川東保憲・知子、川村宣子、後藤義民、小西美美枝、小山久一、斎藤 滋、齊藤正雄、佐伯武美、佐々木 裕、沢田浩一、志賀泰子、品川睦生、島田芳郎・陽子、白澤昌彦、高栗 勇、高橋良直、田中志司子、田辺 至、千葉久子、徳田和美・恵美、戸津高保・以知子、中正憲信、原 美保、広木朋子、藤澤春信・豊・由美子、辺見敦子、堀さち子、本間久雄、松原寛直・敏子、村上茂夫、山川美香、山口和夫、山本和昭、山本昌子、横山加奈子、吉田慶子

以上 54名

【担当幹事】後藤義民、岡田幹夫



【福 移】 2004年7月4日(日)
殆どの鳥の繁殖のシーズンも終息の時期に入り、巣立って間もない幼鳥も、一人立ちに向って健気な姿を見せています。此処、福移の牧草地・堤防河川敷地での探鳥会は、真夏に向って

今年前半の山野、草原性の鳥の観察に一区切りになる会になります。

カッコウ、オオジュリン、ノビタキ、ベニマシコ、オオヨシキリ、コヨシキリ、モズ、アリスイ、石狩川岸の土手にコロニーを営むショウドウツバメや、イワツバメ、カワセミ、ノゴマ、牧草の刈り取り跡ではウズラなどが記録されています。

集 合＝中央バス福移入口停留所付近 午前9時

交 通＝地下鉄東豊線環状通東駅発 中央バス(北札苗線)福移入口下車

【野幌森林公園】 2004年7月11日(日)、9月12日(日)

「野幌森林公園を歩きましょう」が通常の探鳥会として実施され2年目となりました。のんびりと夏鳥の声に耳を傾け、時々瞳を下に、ひっそりと咲く草花たちの可憐な姿にも感動してください。

集 合＝大沢口駐車場入口 午前9時

交 通＝・夕鉄バス(文京台線)

J R新札幌駅バスターミナル発「文京台西行き」

大沢公園入口下車 徒歩5分

・J Rバス(文京台循環線)

J R新札幌駅発 文京台南町下車 徒歩5分

【鶴 川】 2004年8月22日(日)、9月5日(日)

この時期には、もうすでにシベリア北東部の高緯度の地で繁殖を終え、越冬のため南へ渡りはじめているコチドリ、

メダイチドリ、ダイゼン、チュウシャクシギ、キアシシギなどのシギ・チドリ類が、この鶴川の河口でも羽を休めています。近年、河口付近の海岸線の浸食が進み、干潟や湿地が減少し、シギ・チドリ類の渡来数も減少傾向にありますが、チュウヒやオオタカも度々現れ、冬羽に衣替えたノビタキ、オオジュリン、時にはアジサシ、カワセミが見られることもあります。

集 合＝J R日高線鶴川駅前 午前9時30分

☆観察用具、筆記具、昼食、雨具などをご持参下さい。

☆交通機関をご利用の方は、各自でお確かめ下さい。

☆いずれの探鳥会も、悪天候でない限り行きます。

☆探鳥会の問い合わせは、

011-563-5158 白澤宅へ

「野鳥だより」の正式誌名について

「野鳥だより」に掲載された記録の中には貴重なものも含まれ、本誌が引用文献などとして用いられることが多くなりました。表紙タイトルでは「野鳥だよりー北海道ー」とも読めるとの指摘もあり、おそまきではありますが、正式誌名を「北海道野鳥だより」と決めるとともに、表紙右上の号数表示をこれまで通りですと「第136号」だけですが、「北海道野鳥だより第136号」としました。

鳥 民 だ よ り

◆ 野鳥写真展出展品目録 ◆

辻 正一	「アオバズク、フクロウ」
山田 良造	「セイタカシギ、シマフクロウ」
片山 實	「カワウ、コアカゲラ」
小堀 煌治	「ユキホオジロ、ハイタカ」
志田 博明	「コゲラ、キビタキ」
渋谷 信六	「コシジロアジサシ、ユキホオジロ」
田向 一彦	「ノゴマ、キビタキ、オオルリ」
稲村 勇一	「オオマシコ、イスカ」
石田 典也	「ウグイス、ヤマゲラ」
高橋 良直	「エゾライチョウ、ハヤブサ」
荒木 良一	「アラナミキンクロ、ミコアイサ」
	以上 11名 23点

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・六階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465

HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>